

アユの資源状況について

1. 平成24年のアユ産卵状況と資源維持対策

(1) アユ産卵調査

◆県内の主要河川における昨年のアユ産卵量は7.1億粒で
（流下量14.2億尾）

- ・産卵期直前の8月魚群数は平年の58%であったが、安定した漁獲量が得られる100億粒の産卵は見込める親魚は琵琶湖にいたるとされていた。

(2) 人工河川によるアユ資源対策

①通常放流：9月初旬に人工河川（安曇川、姉川）へ11.5トンの親アユを放流。

放流アユの産卵により22.5億尾のふ化仔魚が琵琶湖へ流下

②追加放流：天然河川でアユの産卵が少なかったため、10月15日～26日にかけて7トンの親アユ（淡水養殖組合から購入）を追加放流

親アユの産卵により、10月末から11月中旬にかけて11.5億尾のふ化仔魚が琵琶湖へ流下

(3) 総ふ化仔アユ量

◆天然、人工河川を併せたふ化仔アユの総流下量は48.2億尾で
（約300トンの漁獲につながると試算（過去3年アユ漁獲量553～683トン）

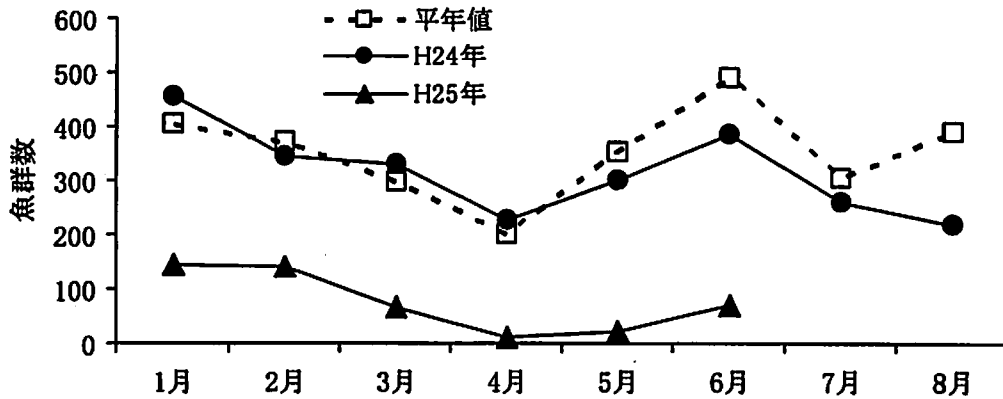
- ・約300トンの漁獲につながると試算（過去3年アユ漁獲量553～683トン）
- ・養殖用や河川放流用となるアユ苗の漁獲量は確保されるものと期待（過去3年間のアユ苗漁獲量48～100トン）

(4) 早期アユ苗の漁獲状況

- ・12月1日に始まったエリ漁によるアユ苗の早期漁獲は順調に推移し、12月21日までに注文量の26.8トンを漁獲して終了。

2. 平成25年のアユ資源状況

(1) アユ魚群数



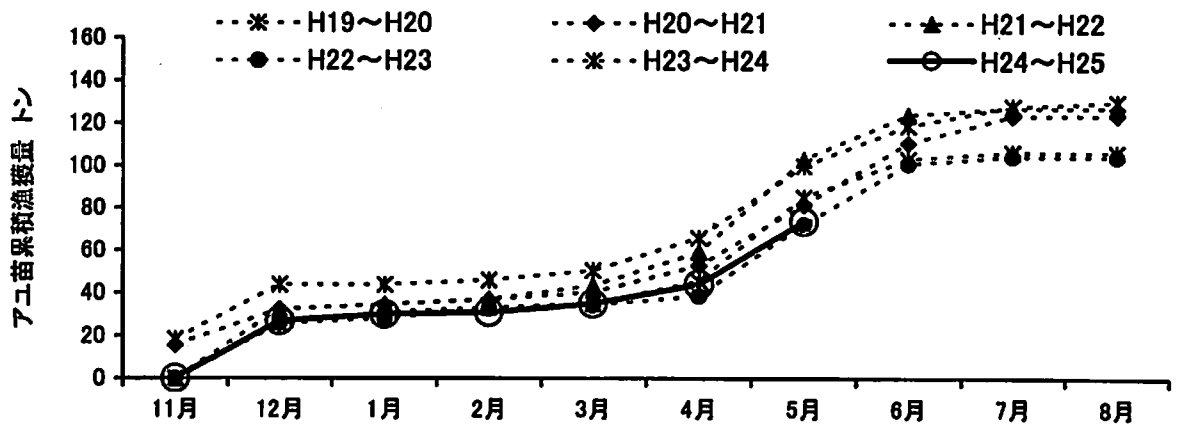
・平年比は、1月36%、2月38%、3月22%、4月6%、5月7%、6月14%。

◆魚群数は4月以降、増加傾向にあるものの、非常に少量となっている。

(2) アユ苗の漁獲状況

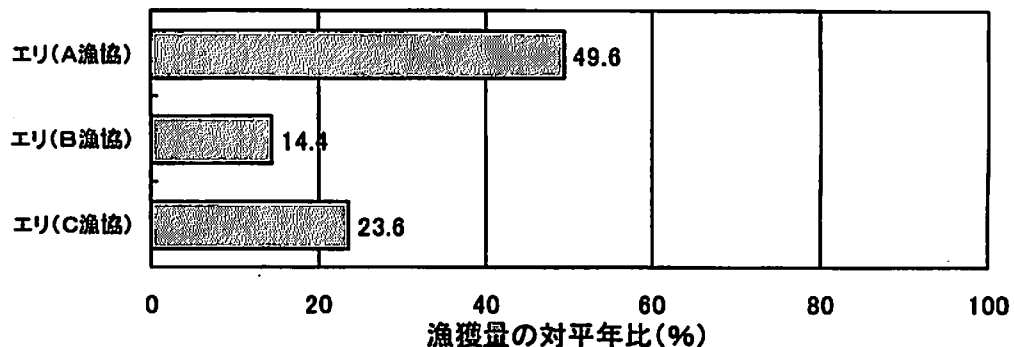
- ・1月10日から再開し、6月13日までに59.0トンを漁獲。
- ・平成24年12月1日からの累積漁獲量は85.8トン。

(県漁連統計：過去5年間のアユ苗漁獲量114トン～130トン)



(3) エリによるアユの漁獲状況 (5月)

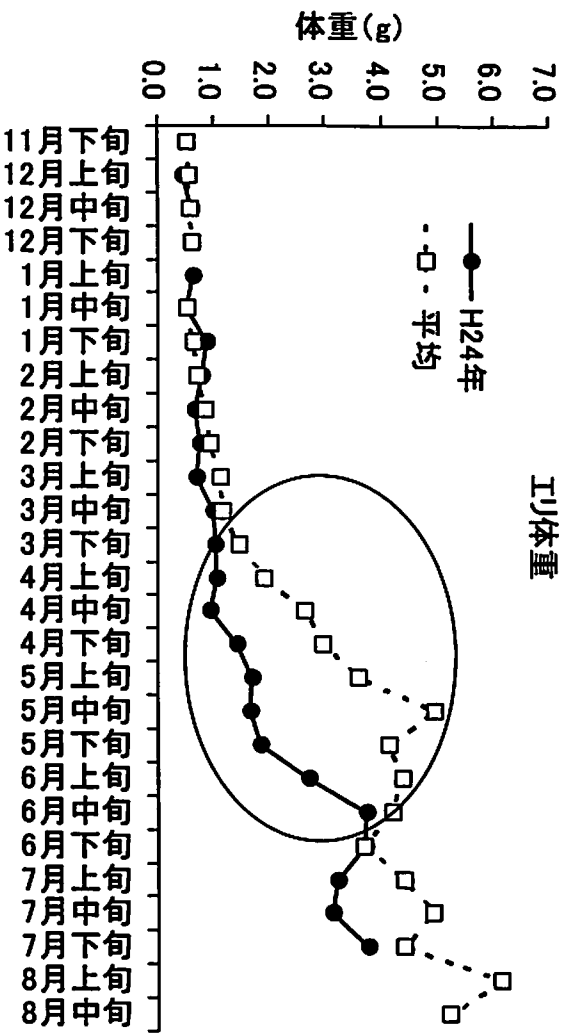
○平成25年5月アユ漁獲量の対平年割合 (過去5年間平均)



3. アユ産卵量減少要因について

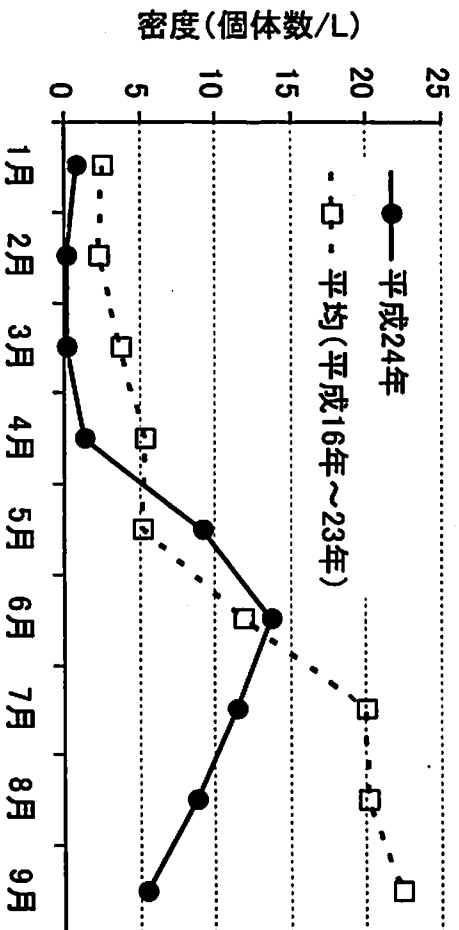
(1) アユの育成状況

①成長について



- ・平成24年のアユはシーズンを通して成長が悪かった
- ・特に4・5月に顕著な成長不良がみられた。

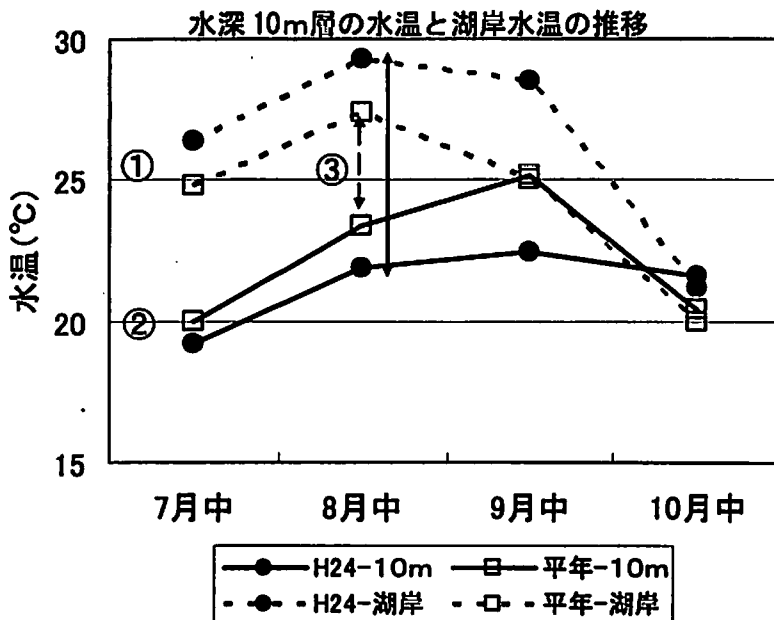
②アユの餌環境 (カフトミジンコ、ケンミジンコ類) について



- ・1～4月にかけてアユの餌となるミジンコ類 (カフトミジンコ、ケンミジンコ等) が少なかった。
- ・7～9月にかけて例年なら増加するミジンコ類が少なかった。

◆慢性的エサ不足による成長不良に陥っていたと思われる

(2) アユの生息水温環境について



成長不良のアユが、水温障壁で河川にスムーズに遡上できず、河口周辺で待機している間に、餌不足や体力不足、捕食によって減耗したことが一つの要因ではないかと考えられる。

4. 産卵不振の原因解明の取り組み（水産試験場による平成25年調査研究）

◆原因解明とアユ資源の動向を正確に予測できる技術を開発

I. アユ資源動向予測調査研究

(1) 産卵量減少要因解明調査研究

- ・水温障壁により産卵を抑制されたアユのその後の行動（産卵の有無等）を検証する。
- ・これまでのアユ標本から、餌環境とアユの成長や成熟についての関係を把握する。
- ・アユを捕食する可能性のある魚種の消化管内容物を調査し、捕食されるアユの量や体型等を把握する。

(2) アユ資源の動向予測

- ・魚群探知機に現れる魚種や体型を把握し、季節ごとの魚群行動を解析することで、より精度の高いアユ資源の予測技術の確立を目指す。
- ・環境要因の変動とアユの成長・生残の関係を把握するため、耳石日周輪の解析によるアユ成長履歴を調査する。

(3) アユ資源の減耗が遺伝的多様性に与える影響調査

- ・アユの遺伝的多様性評価手法を確立し、アユ減少前後の遺伝的多様性の変化の有無の検証を行う。

II. 漁況予測調査研究

例年の産卵調査、ヒウオ生息状況調査、魚探調査、漁獲状況、成育状況調査を継続実施し、アユの漁況予測を実施する。